

4歳児と5歳児とのごっこ遊びにみられる発達差に関する一考察

山口 茂嘉（岡山大学） ○門松 良子（岡山市立芥子山幼稚園）

研究の目的

ごっこ遊びは園生活の中で繰り返し行われる遊びである。ごっこ遊びは道具の使い方だけでなく、虚構場面の想像、社会的な関係の理解、自己コントロール能力などが要求される高度な活動であると言われている（太田，1999）。それだけにごっこ遊びは幼児にとって欠くことのできない重要な遊びである。しかし、いつも同じことの繰り返しでは子ども達の発達を促すものとはならない。すなわち、子ども達の自然発生的なごっこ遊びを見守っているだけでなく、子ども達の主体性を大切にしながら発達に応じた教師の援助が必要である。山口・門松（2002）の研究で「乗り物ごっこ」の中で子ども達が試行錯誤をしながら遊びを創り出し達成感を獲得できるようにするためには、子ども達の発達をとらえた教師の計画性と役割、環境構成が重要であることが明らかにされた。幼児の発達に応じた適切な指導を行うためには、ごっこ遊びが幼児の発達に応じてどのように変化していくのかを理解することが必要である。そこで、4歳児と5歳児の「お店ごっこ」と「乗り物ごっこ」の事例を通して4歳児と5歳児のごっこ遊びの違いを明らかにし、幼児の発達に応じたごっこ遊びの指導のあり方について考察を加える。

研究の方法

対象児 岡山市立S幼稚園、K幼稚園2年保育の
4歳児、5歳児

記録法 場面見本法によるビデオ録画

期 日 平成9年4月～平成14年9月

結 果

4歳児と5歳児の「お店ごっこ」「乗り物ごっこ」の違いを分析したものが表1と表2である。

表1「お店ごっこ」の比較

	4歳児	5歳児
売 る 品 物	①絵本、道具箱、クレパス、のり、サインペンなど ②あき箱、プラスチック容器、カップ、アイスクリーム容器 など	①ラーメン、焼きそば（毛糸で作った物） ②たこ焼き、串焼き、綿菓子、アイスクリーム（いろいろな材料で作った物）
環 境 構 成	①机を並べ、椅子に座って売る。 ②積み木を並べて中に入	①ラーメン屋、焼きそば屋机、椅子、積み木、看板鍋、お玉杓子、ボール、割り箸、鉄板、 など ②お祭りの店

	って売る。	机、椅子、看板、たこ焼き器、オープントースター、フライパン
遊 び の 様 子	①椅子に座って売る。「いらっしゃいませ」「おにぎりせんべいですか」「何いりますか」とお客を呼ぶ。お客が買ったものをビニール袋に入れる。 ②積み木の中に座って売る。「いらっしゃいませ、いらっしゃいませ」「何がいいですか」「カップラーメンですか」お客が買ったものをそのまま渡す。	①ラーメン、焼きそばを作りながら売る。味見をする。箸で混ぜる。ざるに入れて水を切る。焼きそばを焼く。カップ、お皿に盛りつける。 ②浴衣を着て売る。たこ焼きを焼きながら火をおこしたり、うちわであおぐ、オープントースターで串焼きを作るなど仕事をしながら売る。

4歳児の「お店ごっこ」は身近にある物（自分の持ち物、製作材料の廃材など）をそのまま並べて売り物にし、物を並べるだけで店になっている。そして、「おにぎりせんべいですか」などと品物が無い物も売ろうとしたり、買いに来た幼児も「ぬいぐるみありませんか」など品物がなくても自分の欲しい物を買おうとしたりしている。また、廃材を並べお菓子、カップラーメン、アイスクリームなど容器だけでその物として売っている。「いらっしゃいませ、いらっしゃいませ」「何、いりますか？」など役割に必要な言葉を使いながら店の人になりきって一人一人の幼児が売ることだけを楽しんでいる。しかし、5歳児になると言葉だけで売のではなく、ラーメンや焼きそば、たこ焼きなどを作ったり、うちわであおいだり、火加減を見たりなど店の人がする動作を真似て店の人になりきって表現をしながら売っている。また、店に必要な物も本物を使うことでより実際の店に近くなり、なりきって遊ぶことができている。売る品物もいろいろな材料を使って実物に近い物を作って売っている。

表2「乗り物ごっこ」の比較

	4歳児	5歳児
環 境 構 成	①長いダンボール箱を電車にする。ハンドル（円形のボタン）カセットテープレコーダー（音楽）切符売り場	①大きいダンボール箱で電車を作る。（運転席、ワイパー、つり革、鐘、ハンドル）切符売り場、地図、案内板、弁当売りワゴン、線路、待合室、運転手の帽子、笛、カセットテープレコーダー（音楽）

	②椅子を並べて積み木、ダンボールで囲ってバスを作る。天窓の敷居からつり革を下げる。ハンドル(フープ)、カセットテープレコーダー(音楽)、運転手の帽子、バス停	②大きいダンボール箱で作った新幹線(運転席、自動ドア、つり革、ハンドル)、切符自動販売機、弁当屋、改札口、待合室、運転手の帽子、マイク、カセットテープレコーダー(音楽)
遊びの様子	①運転手が箱の一番前に座り、ハンドルを手に持って回している。お客は運転手の後ろに並んで箱の中に座って乗っている。運転手が音楽を止めて「着きました。着きました。」と言う。箱が壊れても、そのままお客が乗っている。 ②運転手二人が帽子をかぶりハンドルのフープを回しながら運転をする。音楽がかかると出発する。お客がバス停で待っている。バスが来ると乗り、椅子に座る。運転手に切符を渡す。「幼稚園まで行って下さい」とお客が言う。	①電車をみんなで作る。ダンボール箱で作り、絵の具を塗り本物のような電車にする。運転手は帽子をかぶり運転をする。地図を作る。切符売り場で切符を売る。ワゴンを押して弁当を売る。それぞれの役になって仕事をする。 ②みんなで作った新幹線でそれぞれの役の仕事をする。運転手は帽子をかぶり、運転をしたり、アナウンスをしたりする。切符の自動販売機で切符を売る。改札口で切符を切る。車掌が合図をする。本物らしい弁当を作り、弁当売り場で売る。お客が弁当や切符を買って新幹線に乗る。新幹線の中で弁当を食べる。

4歳児は、長い箱があるだけでそれを電車に見立てて遊ぶことができる。そして、丸い物があるとそれをハンドルにして運転手になりきって運転をしている。音楽があることで電車が走っているつもりになり、お客の幼児も楽しく乗っている。箱が壊れて形がなくなってもその上に座って電車に乗った気分になり遊びが続いている。また、椅子を並べて積み木やダンボールで囲んでバスになっている。そして、運転手が二人いて二人で運転をしても、不都合とは感じず喜んでフープをハンドルにし、手に持って回しながら運転をしている。しかし、5歳児になると、自分達が見た通りの本物と同じ電車や新幹線を作り、駅の様子の細かい所まで再現し遊びの環境を自分達で作りながら遊んでいる。弁当も本物の容器を使いより本物らしい弁当を作って売っている。それぞれの役割を分担し、役に必要な言葉を使ったり動作をしたりしながら役になりきって仕事をしている。それぞれの遊びの場がつながりを持ち全体の遊びの場が構成されている。

考 察

4歳児と5歳児のごっこ遊びに明らかな違いがみられた。4歳児は物と場があれば自分の思いのままに見

立てて体験した世界や想像の世界の中に入りなりきって自分の思いを表現しながら遊ぶことを楽しんでいる。5歳児になると自分の体験したことや生活の中で得た知識を実物どおりに再現して遊んでいる。より本物らしい物を作ったり本物の道具を使ったりすることで現実の生活の中に入ったつもりでなりきって遊んでいる。そして、遊びの中で役割意識をもちその役割に応じた動作をすることであこがれている大人の世界に入りこんで背伸びをして遊ぶことを楽しんでいる様子が見られる。それだけに遊びが豊かになるためには豊かな生活体験が必要であり、豊かな遊びを体験することで生活が豊かになると考えられる。太田(1999)は、ごっこ遊びを通して子ども達が獲得した諸能力は、学童期の系統的な学習へとつながると指摘している。そして、ごっこ遊びは、知的好奇心を刺激し、抽象的なものの認識、思考、周囲との関係のなかで自分の行動を決定するなど学習の基礎となる能力を育てる豊かな教育力を持っていると述べている。それ故、幼児期にごっこ遊びをしっかりと経験することができるとは、子ども達が体験したことや想像したことが幼稚園生活の中で自由に実現できるような遊びの場と物、時間を十分に保障し、自己の能力を出しきって遊ぶことができるようにしていくことが必要である。そして、ごっこ遊びの中で子ども達に何が育っているのか発達を見極める教師の確かな目が必要であり、子ども達と教師がお互いに力を出し合って遊びを創り出していくことが大切であると考えられる。また、ごっこ遊びを通して、より幼児の発達を促すためには4歳児と5歳児の発達差をとらえて、早い時期から形を整えたごっこ遊びをさせるのではなく、4歳児の時には身近にある物を自分なりに見立てて想像の世界の中でありきって遊ぶ4歳児なりのごっこ遊びを十分楽しませることが必要である。そして、そのことが5歳児になってからの組織的なごっこ遊びの基となり、共通の目標に向かって一人一人の幼児が自分の力を出しきって遊びを創っていく楽しさや友達と一緒に力を合わせて遊びを進めていく達成感や満足感を感じさせることに繋がるのである。

幼児の発達に合わせてねらいをもち、子ども達が主体となった計画性のあるごっこ遊びの展開を促すことが重要である。

参考文献

- 山口・門松 2002 乗り物ごっこの展開に関する一考察 日本保育学会第56回大会研究論文集, pp. 870-871
太田光洋 1999 保育で大切なこと, ジョ・プレス